

## 満州守備と

### 銃後の護り・妹の死

岐阜県 桂川 保秀

—小学生のころ、誤って中指を切断され、大分苦  
勞をされたようですが—

そうです。徴兵検査で第三乙でした。昭和十八年五月、召集令状がきて飛び上がって喜び、父も大喜びでした。

満州で警備と演習に明け暮れ、一人の兵を養うために銃後の人たちがどれだけ苦労しているかよくわかりました。妹にもどれだけ苦労をかけたかの思いで胸が  
いっぱいでした。

終戦—復員—結婚と私はまあまあでしたが、私の結婚後、数日たって、心勞と過勞のため、妹が死出の旅に旅立ちました。二十二歳の若さです。

私の身代わりになったのだと今でも思っています。

指がないので第三乙との結果

小学校六年生の夏、母がとうもろこしのカラを切るようにと言ったのでオシギリで切っていた。そこへ隣の子が遊びに来て、ボクが切る切らないなどと言って切っているうちに、押し切れず、誤って自分の指を切ってしまった。人差指が切れ、中指も少し削れた。すぐ病院へ行ったので、一カ月ほどで治った。

自分は体が大きく、学校でケンカしても腕力では勝った。だが、その後に「おまえは大きくなって戦争に行けない」と言われ、悲しくてたまらなかつた。僕は泣きました。

昭和十七年の徴兵検査で、やはり第三乙でした。それでもその年の暮れに第二補充に編入。あくる年の五月、父が「とうとう来たよ」と赤紙の召集令状を持ってきました。その時、自分はそれを手にとり、飛び上がって喜んだ。昭和十八年五月二十九日、三島九部隊に入隊しました。家で門出を祝ってもらい、駅まで行くと会社の女子から一本、青年団からも一本、寄せ書きの旗をもらいました。汽車の窓から体を出して両手

に一本ずつを持ち、旗を振りながら、歓呼の声に送られて中津川を出発しました。三島中部九部隊へ入隊しました。その日は衣服の取り換えをすませて軍の説明を聞き消灯。出発前の自由時間に顔見知りの先輩と出会う「いよいよ自分にも来た」と言い、お互いに手を取り合って喜んだ。「元気でやれよ」と別れた。

それから間もなく、朝鮮の釜山港へ上陸、貨物列車に乗って、どんどん奥へ。下車したところが満州。整列、行軍して着いたところが九二九部隊鞍馬十五榴でした。

#### 戦友が分けてくれた御飯に感涙

各班長に引率され、中隊に入り、自分は指揮小隊に配属されました。少年兵四〜五人でした。しばらくしてお互いの紹介があり、自分の寝台を決め、夜食をすませて食器を洗い、剣、靴を磨いて点呼をとってから消灯。次の日から教育を受け馬も決めてもらいました。その翌日から、モッコを持って寝わら出しの仕事を。これが一番つらい仕事だった。後は馬の水与え、毛ぐしの手入れ。これが毎日の繰り返しでした。そして、

馬の運動には二頭を引率するのでした。

ある日、少年兵の馬が蹄鉄を落としてしまった。班長は自分の靴下を脱ぎ、馬の足にはかせて、靴だけをはいて馬屋へ帰った。そこで皆、制裁をくわされました。そんな日々の繰り返しでした。

あるとき、自分は夜食をすませて入浴に行く時間だったが、行く振りだけをして、酒保へ入ってうどんを食い、タオルだけを濡らして帰りました。「自分は入浴に行ってきました」と言うと、「お前は入浴にはこなんだ」と上等兵に言われ、ビンタをもらいました。

「お前はそんなに腹がへるのか？」と聞かれ、「はい、自分はひもじい」と言いました。そうしたら、次の日から戦友が自分の飯は減らして私にくれました。その時は涙が出るほど嬉しかった。

またある日、演習で山へ行き林の中で露営をしました。深夜、狼の遠吠えが聞こえ、まもなくすると自分たちの露営を目を光らせてにらんでいます。自分は思わず銃の引き金を手を当てたが、待てよと思いい司令長に報告しました。「すぐ火を焚け」と言われ、枯れ

木を集めて火を焚くと、狼は帰っていきました。

そんなことのある日、中隊へ帰り、消灯前、内地の妹より、手紙が届きました。

「……お兄さん、お元気ですか。家では父は大分治つてきました。私は田植えの仕事で、すいたり、かいたり、肥をまいたり、色々の仕事をして、ぶじにすみましたので、御安心ください。お兄さんの分まで私がやりました。私は青年団などに行くなど毎日元気でいます。兄さんも元気でお国のために働いてください。」

さようなら

という便りがきました。

頑丈で一週間に二度の輸血

一年半ほどたったある日、自分は呼び出され、六名ほどと一緒に病院へ行き、少年兵に輸血をしました。自分はいたつて健康で体重七十五キロぐらいあったのです。それで自分が一番初めに二〇〇ccとられました。すんで帰るときに看護婦さんが、「また、一週間もすれば血はとれる」と冗談半分のように言いました。中隊へ帰って食事をしましたが普通食でした。

一週間するとまた病院に呼ばれ輸血です。兵隊に血を入れるところを見ていたら、見る見るうちに顔色が良くなり、目をパッチリと開いて自分を見ました。「貴様に俺の血をうった」と言ったら、頭でうなずきました。「早く元気になれよ」と言つて別れました。この日の夜食も普通でした。

幾日かして自分は衛兵につきました。夜になるとふと内地のことを思い出しました。彼女は元気であるだろうかと考えたときに浮かんだ歌が思い出された。

うしろハゲ山、前ソ連、

尾のないキツネが出るそう

おれも二、三度だまされた

そんなことを思い出してみても、自分たちの部隊は女のいる所へは外出禁止で行くことができないのです。そんなことから、女には三年間、用なしでした。

それから間もなく自分は残留になり、衛兵勤務に一日おきでつきました。一カ月をすぎて中隊の健康診断がありました。自分の体重は四十八キロに減っていたのです。そんなわけで任務をとかれました。

その後、部隊移動があり、サイパンへ行った人は、途中で王碎にあつたと後で聞かされました。

サメのついでくる海を渡つて

昭和二十五年五月、大移動があり、自分たちの部隊は四列縦隊で駅まで行き貨物列車に乗り、東寧を後にし釜山に着きました。それから船に乗り、青空の下、青い海へ。後を見るとサメがついてきていた。幾日かして港に上陸。行軍してついでいった所が、茨城県の学校でした。

翌日から、一、山の伐採、二、海より少し離れた山の方で防空壕掘り、そして自分は、三、製材をする所へ行く、ことに任務が割りふられました。

海辺の近くの民家で班長一名と私たち六名で寝泊りをしながら仕事をしました。

ある日、材木を取りに外へ出ると、B26の小型飛行機が兵隊をめぐりて機銃掃射、小型爆弾を二、三発落としたのです。そのとき、ヒュウヒュウと音がしたので、自分は思わず地べたに伏せると同時に、壁にガツンと当たった音が聞こえました。後で起きて見ると、

自分の立っている横の板壁に命中していました。自分はゾツとしました。それから毎日、同じことの繰り返しでした。

昭和二十八年八月十五日正午、班長が大事な報道があるから部屋のラジオで聞けと言いましたので、聞いてみると、天皇が終戦だと言われました。この時、皆一同、ためいきをついて寝ころびました。

九月十五日、我が郷土、中津川へ到着しました。途中、東京駅で他の汽車に乗っている復員兵が錦の袋に入れてたてかけてあつた軍刀をアメリカ兵に持つていられる光景を目撃しました。その将校はうらめしそうな目で見ていました。

我が家に「無事帰りました」とあいさつ。食事をし風呂につかつてぐっすり眠りました。父は無事に帰ったのだから早く嫁をもらうといひました。数日後、青年団にいた女性に会い、いろいろ話しているとまだ一人にいると言ったので、冗談半分に嫁にもらつてやると言つて別れました。それが本当となり結婚することになりました。

結婚後、数日すると妹はこれで安心だと気をゆるめたようで、肺炎にかかり、二十二歳という娘ざかりに死んでしまいました。葬式で涙ながらに焼香をしていた青年がいました。妹の彼氏でした。来春には結婚の約束をしていたとか。娘ざかり、青春時代を戦争のために破壊された妹、その悲しみは一生忘れることできません。

### 【解説】

指がないのに召集される。こんなことは桂川氏自身は思ってもいなかったと思う。昭和十八年五月、三島の野戦重砲兵隊へ入隊したというが、この時期には兵役に関係ない第三乙種の男子も、また妻帯している子供もある四十歳近い未教育の補充兵も召集されている。

最強を誇った関東軍も、南方はもちろん、内地防衛のためにも大移動が開始された時期であります。

中国においては米軍による援蒋も逐次盛んになっており、在支米軍基地は増強されていた。これがため、支那派遣軍は大陸打通の大作戦を策定し大本営に実施を

具申しており、これが昭和十九年四月よりの京漢打通、六月よりの衡陽攻略、九月よりの湘桂打通作戦と続くのであります。

桂川氏の満州においては、昭和十八年十月三十日、大陸命第八百十一号をもって、第二方面軍及び第二軍の編組を解かれ（豪北方面南転用）、同時に新たに第三方面軍の編組を命ぜられ、関東軍の隷下に編入された。それと同時に機甲軍の編組が解かれ（戦車師団は内地及び比島の第十四方面へと転用されてしまう）、同軍司令部は復帰を命ぜられた。

昭和十九年二月以降、対米英豪戦の情勢は急変し、というより極度に悪化したという表現の方が適当である。これがため、関東軍から多数の兵力が抽出転用された。とくに本土決戦のため周辺の比島、内南洋等防衛のための捷号作戦を準備することとなるや在滿骨幹の戦力が大量に抽出された。

大本営は対北方攻撃戦略を「対ソ全面持久作戦構想」の採用変更を決意し、九月二十七日には第二十軍の編組を解かれ、第二十軍司令部は中支第六方面軍

(第十一軍、第二十三軍、第二十軍)に転出した。この第六方面軍の湘桂作戦発起は前述のごとく六月である。

当時の関東軍には未だ第十師団(後に南方フィリピン)の第十四方面軍編入、第二十九師団(マリアナ諸島で後に玉砕)、戦車第一、同第二師団(前述の本土、比島転出)、第九師団(後に沖繩―台湾)、第十二師団(台湾)、第十一師団(内地四国)、第二十四師団(沖繩で玉砕)、第二十八師団(南西諸島宮古島)、第一師団(レイテ玉砕)、第二十三師団(フィリピン、ルソン)と在満部隊として対ソ戦に備えていた。更に転出した第二十軍隷下の第二十五師団は本土へ、第八師団は末期のルソン戦に投入されたのである。

従って桂川氏も昭和二十年五月、大移動により釜山経中内地へと渡ったのであるが、この要員は本土防衛の第三次(最後の兵備)兵備の要員であったのである。体験記には茨城県の学校とあるが、結城町には第八十一師団(納)司令部が置かれ、その周辺には歩兵三個連隊、野砲兵・速射砲・工兵・輜重兵他が配備されて

いた。

また土浦東北の高浜には第五十一軍司令部、高浜東方の小川には第四十四師団(橋)司令部が、水戸市には第五十一師団(護宇)が置かれていた。第四十四師団は歩兵三個連隊。野砲その他各連隊を持った機動師団であるが、第五十一師団は歩兵四個連隊を主力とした師団であった。所謂甲編成に対しての乙編成ともいえる整備の師団であった。

結局は首都圏を守るため対鹿島灘防衛線の強化のため、山の木の伐採、防空壕掘りが急務であったのであろう。海辺近くの民家に分宿しつつの作業であったが、三月、五月には東京は大空襲により灰となり、その被害は中小都市にまで及んだ。特にテニアン島はB29の基地となり、硫黄島からはB51などの戦闘機がB29護衛と小都市への銃爆撃のため連日の来襲であった。

内地も、外地も、戦地も、本土もない末期的状況下で、不安を持ちつつ故郷を案じつつの軍務の連続であったと推察する。